

角膜移植術推進のための献眼運動

市 瀬 正

下諏訪町 市瀬医院院長

(ライオンズクラブ国際協会 334 複合地区献眼推進特別委員会元委員長)

Eye Donation Campaign Promoting Cornea Transplantation

Tadashi ICHINOSE

Ichinose Clinic, Shimo Suwa

*(Former Chairman of the Special Committee to Promote Eye Donation,
Lions Club International, Multiple District 334)*

Key words: eye bank, cornea transplantation, donor registration, ophthalmology, Lions Club
アイバンク, 角膜移植, 提供者登録, 眼科, ライオンズクラブ

I はじめに

近年、臓器移植が各方面に亘り研究が進められている。移植と人工臓器は医学が到達できる究極点として救命・延命のため熱い視線を受けてゆくことであろうし、一方その問題をとり巻く人生観、生命論、社会的コンセンサスの問題等、論じてゆかなければならないことも多い。その中には欧米人と日本人、西洋と東洋の人間性、お国柄、宗教観、学問等々簡単には動かし難い根の深い問題もいくつもあることと思われる。

そうした渦の中で、角膜も臓器の1つと考えてすでに相当に永い歴史を持っている献眼運動(アイバンク運動)について、臓器移植の場が華やかな舞台の上であるとした場合、その臓器の提供をして頂く人達に対してスタンフォード大学移植外科主任教授 Dr. スチンソンの言われた「臓器移植の成否の鍵は一にかかって大衆への教育と啓蒙にある」との言葉を60年前から黙々と舞台の下で地道に実践しているライオンズクラブの行動の記録を日本における献眼運動の歴史を追いながら、主として長野県内の動きを中心とし多少の私見も交えて考えてみたいと思う。

II 献眼運動の沿革

A ライオンズクラブとの関わり合い

メルビン・ジョーンズが今から70年前、すなわち

1917年ライオンズクラブの創設を企図したその基本精神は、自分達が自由に幸福に暮している陰には、非常に困っている人々が沢山居られるので出来るだけの援助をしなければとの責任感であり、中でも光にとざされた盲いの方の杖になることが最大の関心事だった。1925年オハイオ州セダーポイントで開催された第9回国際大会に出席された三重苦の聖女ヘレン・ケラー女史はライオンズクラブに対して、盲人に対する奉仕活動増進に協力する様に強く訴えられた講演の最後に「あなたのランプの灯を、もう少し高くかかげて下さい。見えない人々の行く手を照すために」としめくられ、参会者に大きな感動を与えたのであった。ライオンズクラブとしてはこれ以前からこの部門の奉仕活動に取り組んでいたが、これにより一段と関心を持つようになり視力保護盲人福祉に関する活動は全奉仕件数の約30%に達するに到った。

時が流れてやがて1952年(昭和27年)に曾っての第二次世界大戦の恩讐を越えてフィリピンからのスポンスにより日本にライオンズクラブが誕生した。当時は尚戦後の混乱期であり奉仕活動は所謂「物」の時代であり、当時の資料によればその頃の視力保護盲人福祉関係の全奉仕に対する比率は約3%強にすぎなかった。その後段々と世相が落ち付くにつれて「物」から「労力」の時代に変わり、さらに高度成長期を経て現在は「心」の奉仕の時代と言われる1億総中産階級の時代

を迎えるに到っている。

そしてライオンズクラブもご多分にもれず「福祉」の時代を迎えた。福祉は目標として健康な生活をめざすものであり、ライオンズクラブ会員中の医師達も大きな関心をもってこの問題を取り上げようとしていた。

しかし当時のアイバンク運動（当時は献眼運動とは言っていなかったが、眼球銀行を作るための運動のみと誤解されることがあるとして4年前に現在の献眼運動と改称された）は各単位クラブが、偶然その会員の中に献眼運動に理解があり、かつ実行力のある人を得たところのみ散発的に活動を行っていたが、これでは弱体でありこの運動を推進するためには同志が集まって大同団結してゆく必要があるとして昭和46年沼津市において第1回アイバンク運動全国大会が、続いて47年倉敷市において第2回大会が開催され逐次その機運の高まりを見せて来た。第3回大会は郡山市で昭和48年に、第4回大会は北九州市で昭和49年に開催され、全国に散在していた献眼運動の重要性を強調する同志の結合の許に情報の交換、運動促進への協力等を行っていたが全国統一運動にはまだ成長していなかった。その間ライオンズクラブの組織上の問題から数回の地区分割を経て各地区が小規模となるにつれて情報伝達も容易となり地区毎の運動の盛り上がりもさかんになって来た。しかしまだ結合の形は単位クラブ毎であり、大きな推進力とはならなかった。

昭和52年、当長野県地区ガバナーに就任された上田市の耳鼻咽喉科医院々長石塚 昌先生は年度最大の行事として上田市において第5回アイバンク運動全国大会を開催され、同時にこの組織を発展的に解散して確固としたライオンズクラブの組織の中の1部門として献眼運動の位置付けに成功され、各地区毎に献眼運動推進特別委員会を、全国の8複合地区に夫々献眼推進特別委員会を、そしてその頂点に複合地区委員長連絡協議会を設置し、これにより全国のライオンズクラブは一勢にその傘下に入り同一運動方針の許に前進することが出来る様になった。

長野県下においても昭和48年頃から石塚先生方を中心に献眼運動の芽生えが見られ始めたが前記のごとく単発的運動で点のつながりに過ぎず、発足後4年間にライオンズクラブ会員を中心として3,600名の登録者を得たのみであったが、その後はクラブ会員の理解も深まりと拡がりを見せ始め飛躍的に増加しつつ急カーブを以て上昇傾向を示しその2年後には14,500名に、昭和57年度には3万人台、昭和58年には4万人台、昭

和59年度には5万人台に達し現在では正に6万人台に乗ろうとして居り、単一地区(県)としては登録者数は全国1位となり、それにつれて死後眼球を下さる献眼者も漸次増加し年間100人前後を教え、現在総計約850名に到り、約1,500名以上の患者に光を与えて来ている。現在においてもライオンズクラブの会員は毎日の様にことある度に登録活動を展開し続けているところである。

B 献眼運動とは

疾病または外傷等による角膜の混濁で光明の世界から遮断された方々に透明な角膜をとり替える（一般向けのPR用には濁ったカメラのレンズをとり替える様なものと表現している）つまり角膜移植術に用いる角膜を死後提供して下さる登録者を募る運動を言うものである。

登録して下さる方々は呼びかけに応じて下さった奉仕の精神をお持ちの方々であり、運動を推進しているのは所謂ボランティアであるが、現在のところ主としてライオンズクラブ国際協会の会員が行っており、当長野県でも同様であるが、当県では他に腎不全で透析を受けている患者さんの組織する長野県腎臓病患者連絡協議会の方々も折りにふれてライオンズクラブに協力して下さり、患者さん方のほとんど全員とそのご家族の方々も進んで献眼登録をすませて居られることは特筆すべきことである。

角膜を待っている患者は今全国に2万人とも3万人とも言われているがその実数ははっきり掴めていない。一方移植病院は全国に多数あって移植角膜が出る日を患者ともども待っている。ところがボランティアが角膜提供者を用意して角膜が摘出出来たとしてもそれはそのまま直ちに移植はできないことになっており、法律によって法人格を持った角膜斡旋業者である眼球銀行（アイバンク）を経由して移植病院へ届けられなければならないことになっている。これは部分とは言え人身売買を防ぐための配慮がなされているからである。そこで先づ自分達の地区の窓口になる眼球銀行を設立しなければ、いくら角膜が手に入っても移植出来ない。各大学、行政体共同組織、各県ライオンズクラブ等が争って眼球銀行を作った（これをアイバンク運動と称したのである）。現在全国で40銀行が設立されているが（表1）角膜入手の多い銀行では経済的に運営困難となり、一方入手のない銀行は開店休業の状態であり、その存続すら危ぶまれているところもあると言う。銀行の設立には法人であるため、基金として2

表1 全国眼球銀行一覧表

順天堂アイバンク	(財)福岡県医師会眼球銀行
慶大眼球銀行	愛知県アイバンク
(財)大阪アイバンク	(財)栃木県アイバンク
岩手医大眼球銀行	(財)三重県アイバンク協会
(財)読売光と愛の事業団眼球銀行	(財)熊本県アイバンク協会
岡山県眼球銀行	(財)群馬県アイバンク
久大眼球銀行	(財)山形県アイバンク
(財)奈良県アイバンク	(財)静岡県アイバンク
京都府立医大付属病院眼球銀行	(財)大分県アイバンク協会
(財)体質研究会眼球銀行	(財)宮崎県アイバンク協会
(財)金沢眼球銀行	(財)神奈川県アイバンク
(財)鳥大眼球銀行	(財)茨城県アイバンク
(財)弘前大学アイバンク	(財)鹿児島県アイバンク
(財)長崎アイバンク	(財)山梨県アイバンク
(財)新潟眼球銀行	(財)徳島アイバンク
(財)岐阜県アイバンク協会	(財)沖縄県アイバンク協会
(財)北海道眼球銀行	(財)滋賀県アイバンク
(財)東北大学アイバンク	(財)福島県アイバンク
(財)秋田県アイバンク	(財)佐賀県アイバンク協会
(財)香川県眼球銀行	(財)千葉県アイバンク協会

**あなたのご協力が
見えない人に光を**

登録申請書

財団法人 読売光と愛の事業団眼球銀行
〒100 東京都千代田区大手町1-7-1 読売新聞社内
電話 (03) 242-1111

氏名

性別 男 女

年齢

住所

電話番号

職業

献血回数

ご家族の氏名

ご家族の住所

ご家族の電話番号

ご家族の職業

ご家族の献血回数

ご家族の氏名

ご家族の住所

ご家族の電話番号

ご家族の職業

ご家族の献血回数

ご家族の氏名

ご家族の住所

ご家族の電話番号

ご家族の職業

ご家族の献血回数

登録と献眼

■あなたもぜひ登録を—
全国の病院では、角膜移植を必要とする方が大ぜい待っています。1人でも多くの盲人に光を贈るために、読売アイバンクは、あなたの登録をお待ちしています。
電話か葉書でお申し込み下されば、早速「献眼登録承諾書」をお送りします。これに必要事項を記入してご返送下さい（料金を受取人払い）。これで登録は完了です。折り返し「登録カード」をお届けします。このカードには登録番号、万一の際の連絡先、協力病院名などが記載されていますので、大切に保管して下さい。

■ご家族へのお願い
ご登録者が万一の場合は、ご遺族からの電話連絡により、直ちに医師が参上して眼球摘出を行い、代りに義眼をお入れします。「登録」というせっかくの善意も、ご連絡をいただかないと全く無駄になってしまいます。摘出は死後6時間以内が最適とされていますので、早朝でも深夜でも、一刻も早いご連絡をお願いいたします。
なお未登録の方でも、ご本人のご遺志とご家族のご同意があれば、「死後登録」も可能です。

あなたのランプの灯を
もう少し高く
かかげてください
見えない人々の
行く手を照らすために



ヘレン・ケラー

読売アイバンク登録のしおり

財団法人 読売光と愛の事業団
東京都千代田区大手町1-7-1 読売新聞社内
〒100 電話 (03) 242-1111 (大代表)

図1 眼球銀行パンフレット 一面（読売光と愛の事業団）

角膜を交換すれば 明るい光が戻ります



「光のプレゼント運動」を 積極的に推進



視力障害

読売アイバンク

■目の不自由な人たち

この世に生まれて四季折々の風景や、愛する家族の顔も見られず、暗闇の生活を余儀なくされている人々は、全国に33万6千人もいます（昭和55年、厚生省調べ）。そのうち5～10%の方は、角膜を交換すれば光を取り戻すことができると推定されています。

■角膜移植とは

角膜は黒目の表面を覆っている薄い透明な膜です。これを通じた光が、目の内部に達してはじめて物が見えるのです。ですから、病気が怪我で角膜が白濁したり、傷ついたりすると、視力が低下したり、失明したりしてしまいます。この濁った角膜を、透明な角膜と交換する手術を「角膜移植」といいます。

移植手術で開眼する疾患も、最近では環境の改善と薬の進歩によって、トラコーマや梅毒などによるものは減少し、代って角膜ヘルペスなどが増加。また工場や炭坑での外傷が減って、交通事故によるものが増えています。これらの患者は比較的若い人が多く、移植手術の意義は非常に大きいといえます。

■光のプレゼント運動

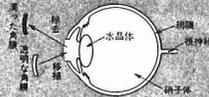
「読売光と愛の事業団」では、視力障害者たちを援助するため、「光のプレゼント運動」を推進しています。治療費がないために暗い人生を送らなければならない人たちが、眼鏡を買い手がたずく不自由な目で学習している児童生徒たちに、治療費や眼鏡を贈り、多くの開眼者や視力向上者を社会に送り出してきました。しかし角膜移植によってのみ、光を取り戻すことが可能な人もたくさんいます。そこで昭和39年、アイバンクを併設して、広く献眼登録を呼びかけてまいりました。

■読売アイバンクはいま

設立当初はアイバンクの数も少なく、全国から登録を受けていましたが、その後各地に新設されるに伴って、登録者をお住まいの県に移籍させていただき、現在では東京都のほか、特に埼玉・長野・島根・広島・山口・高知の各県の方々の登録をお受けしております。昭和60年9月末現在、読売アイバンクへの登録者数は91,237人、また設立以来、これまでに献眼して下さった方々は1,839人にものぼっています。

図2 前二面

光を取り戻す努力は 200年前から



善意のお約束 もっと多くの人に



角膜移植

アイバンク

■角膜移植の歴史

1789年、フランスでガラスを使って試みたのがはじめてといわれています。これは失敗に終わりましたが、各国の研究者の注目するところとなり、動物の角膜やプラスチックの人工膜など、さまざまな実験の末、1930年になってついで死者の角膜を移植することに成功、しかも極めて有効であると報告されてから、各国で盛んに試みられるようになりました。

■移植される角膜は

移植に使う角膜は亡くなった方の眼球から得られます。角膜が透明であれば、近視や遠視や乱視でも、白内障でも、また血液型にも関係なく、すべて使えます。ただし法定伝染病などで亡くなった場合は使えません。

摘出手術は、死後早ければ早い程よく、6時間以内が最もよいといわれています。摘出した眼球は特殊な保存液に入れて保存し、拒絶反応が起きにくい状態にして移植します。今では顕微鏡などによる移植技術の向上と、治療薬の進歩によって成功率も飛躍的に高まり、90%以上にもなっています。

■アイバンクとは

角膜移植に使われる角膜は、亡くなった方の善意によって得られるものです。その「善意のお約束—角膜提供の子約登録」を受けているのがアイバンクです。角膜移植の研究は、わが国でも早くから行われていたが、死体から眼球をいただくことは刑法にふれたため、せっかくの善意も生かすことができませんでした。しかし昭和33年に「角膜移植に関する法律」が成立し、本人の意志と家族の同意があれば、死後、摘出が可能になり、角膜移植が視力障害者の救済に役立つ時代になりました。

■全国に40バンクが

アイバンクは各都道府県ごとにあれば理想的ですが、まだそこまでは行きわたっておりません。現在は36都道府県で40バンクが運営されており、登録者総数は約37万人を数え、これまでに献眼された方は約1万人となっております（昭和60年6月末現在）。移植を待っている多くの患者のためにも、アイバンクの増設と、登録者をもっと増やすことが緊急の課題です。

図3 前二面

登録番号

眼球提供承諾書

財団法人読売光と愛の事業団眼球銀行殿

私は視力障害者の視力回復に役立てるため死後
眼球を寄贈いたします。

昭和 年 月 日

□□□-□□

住所 _____ 電話 _____

(ふりがな)
氏名捺印 _____ ④ 男・女

生年月日 _____ 大 昭 年 月 日生

血液型 A, B, AB, O

(近親者)

私は提供者の意志を尊重し眼球を提供することを
承諾いたします。また提供者の不幸の場合ただちに
貴殿に連絡いたします。

□□□-□□

住所 _____ 電話 _____

氏名捺印 _____ ④ 続柄 _____

○視力の悪い眼でも角膜さえ健康で透明であれば、角膜移植に用いられます。
○死後なるべく早く(6時間)眼球を摘出しないと角膜移植に役立ちません。
○この承諾書と引換えに登録カードをお送り致します。遺族の方は死に
た人の尊い意志が実現されますように、登録カードに記載されました
連絡先(アイバンクや、ライオンズクラブ等)に電報、または電話でご
連絡下さい。
○あなたの死後、近親者が眼を提供することを強く反対された場合には、
約束を取消して差し支えありません。

紹介者 ()

図4 眼球提供承諾書用ハガキ

千万円以上を要し、さらに年間の運営維持費として通常献眼者が1名出る度に眼球銀行の負担額は8万円か

ら、多い時は20万円もかかるのでその活躍の度合にもよるが中程度に活躍したとしても約1千万円を要することになる。登録者の獲得方法、眼球摘出を誰がするのか、その輸送方法は……等は何もきまりはないし規制もない。そこで上手にやる地区と、うまく出来ないで今だに悩み続けている地区とがはっきりして来ている。

前述の石塚ガバナーはこの点に注目されて種々研究の結果所謂長野県方式なるタイプを編み出された。それは下記の様なものである。

(1) 前記の様な莫大な費用を要し、しかも自分達でその資金調達にまで努力と資力を傾注しなければならぬ様な眼球銀行を作る様では肝腎な献眼者獲得運動に力を入れておられなくなるため、既存の充分に活躍している実績のある、しかも自ら大きな資金力を保有している読売新聞社内にある読売光と愛の事業団(図1~3)を当地区の眼球銀行として指定して全面的に窓口となって貰うこととする。

(2) 登録者獲得運動はあくまでライオンズクラブが主力となるが(図4)その促進のために県内各地の自治体、社会福祉協議会、各種ボランティア団体等との連携をとり合い力を合わせる。

(3) 長野県はいくつもの山脈が県を4つに分けている。その内、中信地区と呼ばれる松本市周辺は信大医学部の眼科医を中心とし、東、南、北信地区は県眼科医会および地元ライオンズクラブ会員中の医師により

表2 献眼者用病院名簿

[長野県内]

病院名	電話番号	連絡場所	必要状況	住所/備考
信州大学医学部 付属病院	0263-35-4600	電話交換台より眼科病棟につな げてもらい打合せの事	随時必要としてい る。	〒390 松本市旭3-1-1
長野赤十字病院	0262-26-4131	9:00~17:00まで眼科外来、 時間外は眼科病棟	7月末日現在5名 の必要患者	〒380 長野市大字若里 字桑ノ木島1512-1
北信総合病院	02692-2-2151	9:00~17:00まで眼科、時間 外は眼科病棟又は婦長室にて対 応。交換台にその旨を伝える。	現在必要患者はい ないが、手術対応 は充分に出来る。	〒383 中野市西1-5-63
佐久総合病院	0267-82-3131	9:00~17:00まで眼科外来、時 間外は担当高橋医師自宅に電話 の上打合せの事(0267-82-5843)	2名の必要患者 (急がなくともよ い)	〒384-03 南佐久郡白 田町大字白田197
浅間総合病院	0267-67-2295	現状では移植手術は出来ない。 (設備は有るが)		〒385 佐久市大字岩村 田1862-1
御代田中央記念 病院	0267-32-4711	9:00~17:00交換台に伝える。 時間外は眼科病棟の看護婦に伝 え、医師の指示に従う。	2名の必要患者が 待っている。	〒389-02 北佐久郡御 代田町大字御代田 4107-40

市 瀬 正

病 院 名	電話番号	連 絡 場 所	必要状況	住 所／備 考
野中眼科医院	0263-32-3404	院長に連絡のこと。	随時必要としてい る。	〒390 松本市巾上2-2
岡谷市立病院	0266-23-8000	9:00~17:00交換台より担当 医師へ連絡。時間外は病棟看護 婦又は医師と打合せ、クラブに 返事を貰う。	現在必要としてい る。	〒394 岡谷市本町4
伊那市立中央総 合病院	0265-72-3121	9:00~17:00交換台より担当 医師と打合せ、時間外は当直者 から医師と打合せ後、返事を貰 う。	現在必要としてい る。	〒396 伊那市大字伊那 298-1
昭和伊南総合病 院	0265-82-2121	眼科外来へ連絡、時間外は当直 事務から医師と打合せ後返事を 貰う。	現在必要としてい る。	〒399-41 駒ヶ根市赤 穂3230
【長野県外】				
群馬大学医学部 付属病院	0272-31-7221 (夜間)31-7238	9:00~17:00眼科医局と相談 時間外は眼科病棟(31-7238)と 打合せ。	随時必要としてい る。	〒371 群馬県前橋市昭 和町3-39-15 献眼運動に対する相談 を受けます、積極的に 講演等も応じます。各 クラブは必要時には眼 科医局に申し出て相談 して下さい。
山梨県立中央病 院	0552-53-7111	眼科病棟に連絡	7月末日現在3名 の必要患者	〒400 山梨県甲府市富 士見1-1-1
山梨医科大学医 学部付属病院	0552-73-1111	山梨アイバンクが窓口になる。 TEL 0552-73-6776	随時必要としてい る。	〒409-38 山梨県中巨 摩郡玉穂村下河東 1110
東京大学付属病 院	03-815-5411 (昼)内線8549 (夜)内線8548	9:00~17:00 時間外は当直医師に連絡する。	随時必要としてい る。	〒113 東京都文京区本 郷7-3-1
順天堂大学医学 部付属順天堂医 院	03-813-3111 (全日同番号)	眼科外来に連絡。外来休診日は 当直医にて。 時間外は当直医師と話し合い	随時必要としてい る。	〒113 東京都文京区3- 1-3
昭和大学病院	03-784-8596 (眼科医局) 784-8553 (眼科病棟) 784-8596	9:00~17:00 時間外は病棟当直医師と話し合 い	現在5~6名の必 要患者	〒142 東京都品川区旗 ノ台1-5-8
東京都立駒込病 院	03-823-2101	交換台に 摘出眼球の件で担当医師と相談 したいとの旨を伝える。	随時必要としてい る。	〒113 東京都文京区本 駒込3-18-22

眼球摘出を行う。

(4) 摘出した眼球は移植病院へ急送を要する。近距離または日中の場合は主としてライオンズクラブの会員によって、それ以外の場合はハイヤー、赤帽便等により確実にしかも可能な限り早く輸送する。

(5) 県内外の常時角膜移植可能な病院とは日頃から提携し、正月でも、土日でも、深夜でも受け取って貰える態勢を作って置く。出来ればライオンズクラブ県

本部(キャビネット事務局)に留守番専用電話を設置して今現在直ぐにも角膜を必要としている病院が判る様にして置く。(現在は調査が行き届いていて定期的に文書で本部から通知してくれる)(表2)

凡ね以上の様なものであるが、この長野県方式は眼球銀行経営と献眼者獲得の二兎を追って苦勞している多くの地区と違って、唯献眼者獲得、剔出、輸送のみに専念出来る当長野県のライオンズクラブ会員にとっ

てはきわめて取り組みやすいものであり、前述のごとく全国第1位の献眼登録者を獲得している現況は全国の他の地区の羨望の的となっている。

III 献眼運動の実際

A ライオンズクラブの態勢

今までに記した献眼運動長野県方式における現場のライオンズクラブの態勢は下記のごとくである。

地区キャビネット（県本部）には地区視力保護盲人福祉委員長兼献眼運動推進特別委員長が任命される。尚ライオンズクラブにおける任期は何れも1年間である。その委員会に全県を10区に分けて夫々に特別委員が任命され、その分担する各単位クラブの視力保護運動および献眼運動を指導する。各単位クラブには凡ね5～6名よりなる同上委員会が設けられ夫々に正副委員長がおかれる。万一献眼を希望して居られた方が亡くなられた場合の手順は決められてあり（図5）細部について各単位クラブの事情により異なるところがあることもあるが大筋においてはこのスタイルで行われて

いる。

何れにせよ各単位クラブがあくまでもライオンズクラブ国際協会を形成するライオンズ組織の原点であり、夫々の地域にマッチする様になって居り、この献眼運動についても各クラブごとにクラブ会長、担当副会長および当該委員会の合議によって細則を決めることになっている。

B 啓蒙運動

角膜移植術は各地で行われ、角膜障害による視力障害者も毎年増えこそすれ自然減少はあり得ないのが現実であるとすれば、あとは献眼登録者数の増強、拡大のみが問題となって来る。最近の統計（日本眼病銀行協会、昭和60年9月末現在）によれば全国眼病提供登録者数は378,330人、これに対して全国眼病提供者数は10,072人であり、この統計で見られる通り眼病提供者数に対する眼病登録者数は37人強となり、1人の献眼者を得るためには実に40人位の登録者を要することとなる。さらに最近の登録者がとみに若年令層化しつつあることを見る時、登録者数は今後いくら増加して

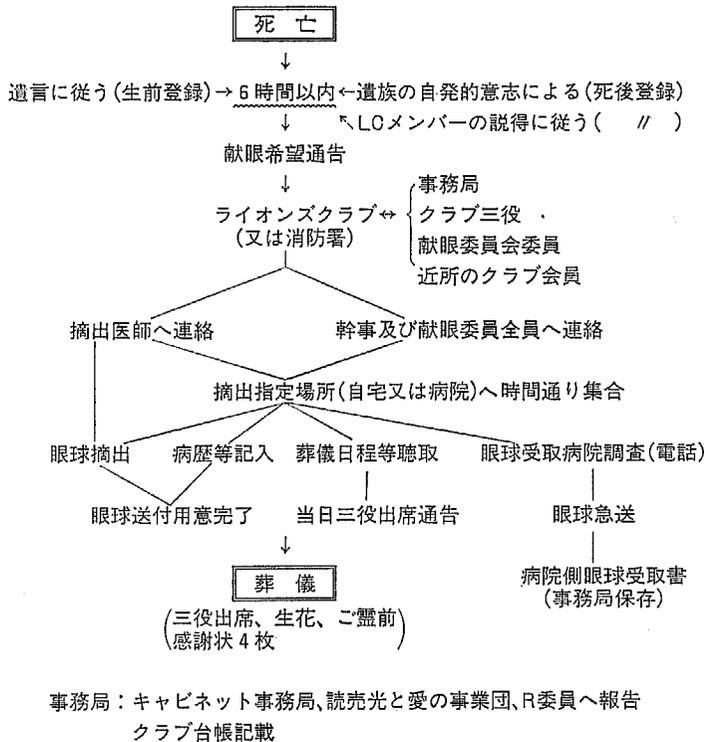


図5 献眼手順表

も現在の尚2万人とも、3万人とも言われている角膜障害者に光を与えるためにはまだとても不足なのであって、献眼運動の継続的運動エネルギーが必要とされる所以もまたそこにある訳である。今仮にこの比率から逆算する時、一応の目安は登録者数100万人をコンスタントに維持し得てやっと恒常的に発生する角膜障害による失明者に光を与えることが出来る訳である。

そこで献眼者の増加を期待するためには何が必要か、各ボランティアは一同頭を悩ますところであるが、ここで始めて先に記述したDr・ステンソンの言葉にある「大衆への教育と啓蒙」と言うことに結論づけられることとなり、継続するPR活動が要求されて来るのである。

ライオンズクラブにおけるPRにはいくつものパターンが考えられるが、第1には内部教育と外部教育とに分けられ、内部とはライオンズクラブ会員に対する教育と活性化である。これは年1～2回の小地区区分毎のセミナー等により周知徹底を図ってゆくことと、機関紙、広報紙による教育をすすめ、先づクラブ会員が納得し、理解してから外部に対して広報宣伝活動を行う様にしている。一方外部へ対するものとしてはいくつも考えられ、夫々に実行されている事柄があるので次に改めて列記する。

1 個人的 PR

前記のごとく夫々に十分に理解のゆく教育を受けた会員が個人個人で行うもので本運動の基調をなすものである。東部町の内科医院長今村 匡平先生は自ら手製のスライドを作り夕食後近隣を歩きPRを行い個人で700名以上もの献眼登録者を獲得されて居られる等、こうした各個人の努力が本運動の基底をなすものであると思う。要は個人の努力と熱意との集積によるものであるが、現実には3千人の地区内(県内)の全会員に毎年1人宛10人の登録者の勧誘を依頼しているがなかなか思うにまかせないのが実情である。

2 街頭 PR

いろいろな方法が考えられているが、要は街頭、デパート、駅前、各種会合等の場でパネル展示、パンフレットの配布説明等を行って浸透を図っている。成人式の会場等はやりやすいが、老人クラブの会場等では余程言葉づかいに気をつけないとかえって反発を買うことがある。パネルもどうしても生々しいものになるので作る大きさにも気を使わねばならない。日赤の献血会場に便乗するのは有効である。街頭へ出てみることは、矢張り献眼等の言葉の中に直接に生と死を

考えるのか高齢者或は年輩の人よりも若年層の方が気軽に登録してくれる様である。場所、時間帯等によっても大きな差が生じて来るが、うまく適中すると手ごたえがはっきりするものである。

3 自治体との提携

近年協力してくれる自治体も増えて来ているが厳しい財政状況なのであまり経済的援助は望めないが、何かとメリットがあると思われる。また、社会福祉協議会との提携も県レベルでは出来ているが各市町村レベルではまだ理解されていないところもある様で画一的に提携が出来ていると言う訳ではない。ただ広報紙等によりライオンズクラブのみでは手の届かない部分にPRが浸透出来ることはありがたいことである。

凡ね上記の様な啓蒙運動を当県では昭和48年以降積み重ねて来て現在の全国1位の実績を築き上げた訳であるが、各地区の現在の登録者数と献眼者数の集計は表の通りである。

	登録者数	献眼者数
北信	8,601	56
東信	20,303	350
中信	9,743	135
南信	22,266	302

(昭和60年12月現在)

C 摘出から葬儀まで

角膜の摘出は自分の死後角膜の提供を申し出ていた方が亡くなられ遺族に誰も反対する人がいない場合、または死亡された本人は登録していなかったが亡くなられた時ご遺族の申し出があって死後登録と言う型で行われることになっている。前記の様な献眼手順表がどのクラブにも出来ているが、その中の誰かのところへ角膜提出の申し出が届くと時間と場所の打ち合わせをした後、遅くとも死後6時間以内に摘出医が向向いてゆく。この時クラブによっては担当委員会の委員またはクラブ幹事が同道して医師が摘出中に別室で亡くなられた方の病名その他眼球銀行へ送る書類を作製するとか葬儀の日程の問い合わせ等をする。眼球摘出は約20分あれば1人で両眼を摘出できる。摘出された眼球は眼球銀行より配布されてある保存液にペニシリンとストレプトマイシンを所定の量だけ混合したものに浸し標本瓶の小形のものに納め、さらにそれを両眼分入れて真中に氷を入れる特製の発泡スチロールの容器に格納して密閉する。眼球を剔出した眼窩には脱脂綿を固くつめて義眼を入れ生前の眼と同じ様に作る。

その間に同行したクラブ員が受け入れ病院を電話で

探し、クラブ員の車か、ハイヤーまたは赤帽の様な業者便かを連絡により確保して置いて直ちに眼球を急送する。ライオンズクラブの担当するのはここまでである。受入れ病院の受取書を頂き、運搬した車の費用とともにクラブは眼球銀行に費用の請求をすると眼球銀行は直ちにクラブに対して払い込んでくれることになっている。

葬儀の当日、ライオンズクラブは会長、幹事、会計の三役若しくはそれにクラブ献眼委員長が加わって出席する。地区の献眼委員会としては仮にも眼球を買ったと思われぬ様に霊前は極力少な目にする様に指導しているが、通常3千円から多いところでも2万円位の間で、これは各クラブによってまちまちである。生花または花輪が供えられる。弔電を発信する。そして庄巻は感謝状の贈呈である。前記のごとく人身売買につながらぬ様に金品の贈呈がないので厚生大臣、県知事、眼球銀行、そして地元で担当したライオンズクラブと4通の感謝状が額に入れて贈られる。ただし厚生大臣の分だけはその時直ぐには間に合わないのの後刻お届けする旨をお伝えするに止め、約6カ月後頃到着と同時にクラブ役員がお宅へ参上してお届けすることになる。

この間に要する費用はご葬儀に持参したりお供えするものの分はクラブ負担であるが凡ね2万円位から多いクラブは6万円も要するところもある。夫々の土地の風習によるもので、止むを得ない場合もあるが極力統一するべく地区委員会では指導に努めている。

IV 今後の展望

献眼登録を進めてゆく中で最も厚い壁は永年の儒教の影響であり、仏話である。「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝の始めなり」であり、そして「眼がなければ三途の川を渡る時に困る」であって、これに一番閉口する。また、一般的には、「死者とは言えむごい」「痛そうだ」と言う肉身の情愛も壁になる。それを吾々は、焼いてしまえば灰になってしまうものが人1人の人生に光を与えるものとなる、として理解を求め。ここの永い間の国民的感情がもう1つ変わってくれば随分とこの運動は進展すると思われる。

総理府統計局の調査によれば、自分の死後他人に臓器を提供しても良いと答えた人は36.5%もあると発表されたのはもう10数年も前のことである。しかしこの数字から成人のみを対象として大雑把な計算をしてみ

ても長野県中で約50万人強の登録者があっても良い筈である。吾々の努力がまだまだ足りないことを示す厳しいデーターである。

今長野県内では時として県内にレシピエントを探すのに苦労する時がある。それ程に単一地区としては提供者も何とか少ないながらも続く時があり、患者の需要をはば充しつつある様である。そう言う場合は東京大学、都立駒込病院、群馬大学、山梨医大、京都府立医大等へ遠距離輸送もしている。大都会では角膜の欲しい患者は人口比に正確に沢山居られるのに比べてライオンズクラブの本運動に関する限りは当地区に比べて低調である。一般住民も都会では隣は何をする人ぞ的なムードがあるのか今1つの伸びが望めないのが現状である。

ライオンズクラブはそれでも今、精一杯の努力を尽していると言える。所謂ボランティアが扱ってはいるが、この様に医学に関係した運動は専門的知識を必要とする部分も少なくない。どこのクラブをみても医師は良くいて2~4%である。その他の会員は医師ではないのだがこの臓器移植の重要性を良く理解して提供希望者の募集に、委員会活動にと精一杯の努力を傾けて居てくれる。本当に立派な人達であると思う。ただしこうしたボランティア活動の常として途中で力を抜いたら直ぐに上昇曲線が止ってしまう。運動をリードする者としてはそうならない様に常にいろいろな角度からの検討をおこたらず、自ら先頭に立つ気力と心構えをくずさない様に努力することが肝要である。

何れかの日、日本中の大多数の人々が献眼運動のみならず総ての臓器移植においてドナーとなって来て移植医学も目覚ましく進歩をとげることが出来、あまった臓器は他国へ輸出することも出来る日が来ればと夢みたくことを考えるのは、こうしたボランティアにのめり込んだ者なら誰もが考えることであろうと思う。

V おわりに

“何1つ 世につくし得ぬ この体
せめて なきながら 捧げまつらむ”

この句を残して献眼をされた方があったと聞く。涙が出るほど尊いお気持である。

積尊は弟子の質問に対してこう答えている。“死後の世界について考えるつもりはない。生きている内にもっと大切なことを考えなさい。観念的なことを考える時間のうちにも死は迫りつつある。この生をどう生

きるべきかを考えよ”

誰も見たことのない三途の川を考えるより目前の人間福祉のために何をすべきであるかを考えねばならない。これからの医学はケアとリハビリと臓器移植であると言ひ言葉も聞く。1人の人間の死を死としてこの世からの消滅を考える前に、そこにまだ使える臓器があればそれによって数名の人を創り出して生かして差し上げることこそ生命の永遠さと尊厳さを十二分に認め活用したことになるのではあるまいか。

医師の方々も、医学生の方諸君も是非機会がある度に献眼登録者の説得に、獲得増加にお力を借して頂きた

い。そしてこの単純だがきわめて人間臭くて困難の伴う運動に参画して頂くことによって本運動の加速度的進行を見ることが出来ると思う。これからの業務の合い間に、学習の間にお心のどこかに止めて頂きお力添えを賜らば幸甚である。

謝 辞

稿を終えるにあたりご指導を賜った支倉逸人教授、御校閲頂いた瀬川雄三教授、資料を賜り、いろいろとご教示下さった上田市の石塚 昌先生、松本市の野中 杏一郎先生に深く感謝する。

(61. 1. 31 受稿)